

今集中最古のもので、その意味において大きな価値を持つものである。
 なお、古筆切として諸家に分蔵されているものに、前掲の高野切の外、伝道風筆の本阿弥切、伝行成筆の関戸本、俊成筆の昭和切、伝寂蓮筆の右衛門切等がある。これらは、本文の系統も明かでないが、筆写年代が古く、その意味において資料的価値が高い。

三

古今集の註釈書中最古のものは、藤原教長のもので、治承二年の成立である。ついで、頭昭の古今集註があり、定家の頭註密勘がある。これは頭昭の註に定家が勘を加えたものである。中世に入ると、秘伝伝授を重んずる時代の風潮に従って、これらの聞書を中心にした註釈書がかなり多く現われてくるのであるが、いずれもここに論ずるに足りないものである。ただ江戸初期に出た北村季吟の八代集抄は、これら旧註の集大成であるが、簡にして要を得ており、今日においても十分活用して然るべきものである。
 八代集抄以後には見るべき註釈書が多い。
 左にその重なるものをあげる。

古今余材抄	契冲	古今和歌集打聴	加茂真淵
古今集速鏡	本居宣長	古今和歌集鄙言	尾崎雅嘉
古今和歌集正義	香川景樹	古今和歌集新釈	藤井高尚

精細で卓説に富んでいる点では正義を第一に推すべきであろうが、余材抄は考証的研究においてすぐれ、遠鏡・鄙言は口語訳を施したもので、入門書として恰好のものである。

明治以後のものとしては
 古今和歌集詳解 中村秋香 古今和歌集評釈 金子元臣 古今和歌集評釈 窪田空穂
 等がすぐれている。なお新註国文学叢書本古今和歌集（小西甚一博士註）、岩波古典文学大系本古今和歌集（佐伯梅友博士註）の註にもすぐれた新説が含まれている。
 また註釈書ではないが、久曾神昇氏の古今和歌集綜覧、古今和歌集成立論、西下経一・竜沢貞夫両氏共編の古今集総索引も研究家の必ず参考すべき書である。

目次

凡例
解説

序	九
卷第一	春歌上 三三
卷第二	春歌下 三三
卷第三	夏歌 四七
卷第四	秋歌上 五三
卷第五	秋歌下 五三
卷第六	冬歌 五五
卷第七	賀歌 六九
卷第八	離別歌 八四
卷第九	羈旅歌 九三
卷第十	物名 九七

卷第十一	恋歌一	105
卷第十二	恋歌二	115
卷第十三	恋歌三	124
卷第十四	恋歌四	134
卷第十五	恋歌五	144
卷第十六	哀傷歌	154
卷第十七	雑歌上	164
卷第十八	雑歌下	174
卷第十九	雑体	184
卷第二十	大歌所御歌	190
序		199

作者略伝	203
初句索引	213

古今和歌集序

やまとうたは、ひとの心をたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげき物なれば、心におもふことを、見るものきくものにつけて、いひ出だせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。

ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおにがみをもあはれとおもはせ、をとこをんなの中をもやはらげ、たけきものふの心をもなくさむるは歌なり。

このうた、あめつちひらけはじまりけるときよりいできにけり。あまのうきはしのしたにて、めがみをがみとなりたまへる事をいへるうたなり。

やまとうた―和歌。「から歌」に対していう。
 たねとして―「たね」は種。根本、もとなどの意。下の「ことのは」の「葉」に對する。
 ことわざ―事件。
 心におもふことを―さまざまな事件の起るにつけてあれこれと心に感ずる、その心の動きを。
 つけて―托して。
 かはづのこゑをきけば―「かはづ」は河鹿。河鹿の声をきくと、これも物に触れては心を動かして啼いているのであつて。
 あめつちをうごかし―詩經の序に「動天地―感鬼神―莫近於詩」とある。
 あまのうきはしのしたにて―この部分は註として後人の書き加えたもので、左註または古註と呼ばれる。筆者は藤原公任だといふが、明かでない。
 めがみをがみに―記紀の神代卷に、伊弉諾、伊弉冉の二神が天の浮橋の上に立つて於能碁呂嶋を作り、そこで夫婦の神となられたとあるが、その時唱和された歌がそれだ、と言ふのである。

5 きらる—来てとまる。

春かけて—春を心にかけて。春を擬人し、春を待ちかねて鳴く鶯の気持を恋の歌に用いる「かけて」という語で表現したものを(四七)(五三)(五五)参照。

6 見らん—「見る」「似る」「煮る」等上一段活用の動詞に「らん」「らし」「べし」とも「等終止形接統の助動詞・助詞の接する場合、「見らん」「見らし」「見べし」「見とも」等となるのは、上一段動詞に才二次的語尾「る」「れ」のつかないさきの古形が残ったものと考えられる。

7 ころざしふかくそめてし—花に対する恋着の心を深く思い染ませているので。「ころざし」は恋の歌に用いる語。「をりければ」「居り」「折り」両説あるが、ここは前説によった。

花と見ゆらん—この「らん」の用法(二六)(二九)参照。
さきのおほきおほいまうちぎみ—前太政大臣藤原良房。

8 とうぐうのみやすん所—東宮をお生み申した御息所。東宮は、後の陽成天皇。雪の—「ふりかかりける」の主語。春の日の光に—詞書の「正月三日」「日はてりながら」の意を受けると同時に、「春」より「春宮」をきかせ、「日のひかり」よりその御眷顧を蒙る意をかけている。

かしらの雪と—「の」は主格を示す。「雪」

題しらず

5 梅が枝にきらるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつつ

よみ人しらず
素性法師

6 春たてば花とや見らんしら雪のかかれるえだにうぐひすのなく

題しらず

読人しらず

7 ころざしふかくそめてしをりければきえあへぬ雪の花と見ゆらん

ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみのうたなり。

二条の後のとうぐうのみやすん所ときこえける時、正月三日、

おまへにめしておほせ事あるあひだに、日はてりながら、雪の

かしらにふりかかりけるをよませ給ひける
ふんやのやすひで

8 春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

雪のふりけるをよめる

きのつらゆき

9 霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさと花ぞちりける

春のはじめによめる

藤原のことなほ

9 と「白髪」とをかけてある。

霞たちこのめも—「はる」を呼びだす序。芽が張ると春とをかける。
花ぞちりける—雪の降るのを花の散るのに見立てたもの。雪が花と見えるのは、花をあこがれる心が強いからである。

10 春やとき—春のくるのが早いのか。「とき」は疾き。
聞きわかん—聞いて区別をしようと思すが、その驚さえも。

11 なかぬかぎり—鳴かない以上はいつまで
あらじとぞ思ふ—「春来ぬるにあらじとぞ思ふ」の略。「思ふ」は、「人はいへども」に對して「われは思ふ」といったもの。

12 寛平御時—「寛平」は宇多天皇の御代の年号(六九—六六)。
きさいの宮—七条院とするのは誤り。宇多天皇の御生母である班子女王、洞院中宮と称せられた。

歌合—歌人を左右に分け歌を合せて優秀を定める競技。この歌合は洞院中宮百番歌合ともいう。

谷風に—「谷風」は、「毛詩の註に「東風也」とある。
13 風のとよりに—風という使者に伴なわせてうぐひすさそふしるべ—鶯を誘い出す案内者。

14 鶯のたによりいづる—鶯は冬の間谷にこも

10 春やとき花やおそきと聞きわかんうぐひすだにもなかずもあるかな
春のはじめのうた
みぶのただみね

11 春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
源まさずみ

12 谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波や春のはつ花
紀ともり

13 花のかを風のとよりにたくへてぞうぐひすさそふしるべにはやる
大江千里

14 鶯のたによりいづるころゑなくば春くることをたれかしらまし
在原棟梁

15 春たてど花も匂はぬ山ざとはものうかるねにうぐひすぞなく
題しらず
よみ人しらず

15 山ざとは—山里では。山里は、花の咲くものうかるねに—大儀そうな鳴き声で。気のなきそな鳴き声で。参照(二三)。
がおそいのである。